

技能・応用実践力習得のための「音楽実技」指導の 実際

著者	石原 享子，桐山 由香，前北 恵美，重信（松山） 久美
雑誌名	大和大学研究紀要
巻	4
ページ	39-44
発行年	2018-03-15
URL	http://id.nii.ac.jp/1677/00000140/



技能・応用実践力習得のための「音楽実技」指導の実際 Skills for Practical Music: A Guide for Acquisition of Performance and Applied Practical Skills

石原 享子^{1 A-G}・桐山 由香^{2 A-G}・前北 恵美^{3 D,F,G}・重信 久美^{4 B,E,F,G}
ISHIHARA Kyoko KIRIYAMA Yuka MAEKITA Emi SHIGENOBU, M. Kumi

要 旨

本稿の目的は、演奏技術を社会活動の場でいかすことができる応用力育成のための授業の構築と、実践した授業内容が適切であるかについて検討することである。対象者は、ピアノ演奏を専攻としない学生である。学生が卒業後に、社会人として音楽を使って仕事をする場面は多岐にわたる。技術の習得にとどまらず、現場で対象者のニーズに合わせて柔軟に応答できる力、つまり応用力の育成のために、学習経験の異なる学生を対象に、個々に応じた教材選択や音楽実技指導を実施した。ピアノ実技、伴奏づけ、初見視奏の3つの領域を評価の観点とした。ピアノ実技においては、初心者・経験者のどちらにも技術の向上がみられた。伴奏づけにおいては、スリーコードのパターンの演習を繰り返すことで、伴奏技術の定着が見られた。初見視奏においては、ピアノ実技の基礎に伴奏づけの技能が加わったことにより、楽譜に瞬時に伴奏をつけることができた。

Abstract

The purpose of this paper is to create course work that uses applied skills for performance techniques in social activities and to determine whether the content of these lesson plans are appropriate. After graduation, there is a wide variety of ways that students can use music in their work. In order to enhance the ability for appropriately respond to people/pupils with special needs, we should consider performance technique and acquiring applied skills. To accommodate students with different learning experiences, we attempted to teach students individually by their levels with selected materials. We evaluated the students' performance from the following three points of view: basic piano technique, accompaniment and sight-reading. In piano practical skills, both beginners and experienced students showed their technical improvement. In the accompaniment harmony, repetitive exercise of commonly-used three chords' pattern improved ability. In sight-reading, the students increased their immediate harmonized skills to given melodies, by integrating basic technique and accompaniment skills. This resulted in students' acquisition of the comprehensive technique and advanced performance skills expected in this project.

キーワード：応用実践力、音楽実技、初見視奏、スリーコード

keywords：applied practical skills, practical music, sight-reading, three chords

I. はじめに

現在、教育機関、医療機関や福祉の現場等多方面で、音楽によるサポートや取り組みがなされている。学生が卒業後に、社会人として音楽を使って仕事をする場面は多岐にわたる。保育者養成や副科のピアノ教育による音楽実技に関する先行研究には以下のものが挙げられる。

村木(2013)は、ピアノ入門者について、「得意な動きが続くとミスも多くなってくる」ため「負担を軽減し、そのかわり指くぐりや指超えを含む運指に変更する」¹⁾ことで、「精神面での影響も考慮すべきである」と述べている。高地(2016)は「一曲ごとにポイントを絞っ

た小さな達成目標をもたせることで学生に達成感を得させて自信をもたせること」²⁾に重点を置いている。また、諸井(2016)によると、「多くの指導者が、これまでに養成校でのピアノ初心者への指導に関する研究を行っており、カリキュラムの改善、副教材研究、指使いに関する研究等、様々なアプローチの仕方でのピアノ初心者への学習支援を試みている」³⁾。石田(2017)は、「既成の楽譜が自分にとって難しい伴奏であっても、それを平易な伴奏系に編曲するための知識、すなわちハーモニー理論の知識があれば保育現場や教育現場にでたときに非常に役立つと思われる。また、コードネームを見ながら伴

¹⁾大和大学教育学部 教育学科 ^{2,4)}大和大学保健医療学部 総合リハビリテーション学科 ³⁾兵庫大学生涯福祉学部 こども福祉学科 平成29年11月24日受理
1,2 equal contribution, 4 corresponding author

Authors' Contribution: A. Study Idea, B. Study Design, C. Literature Search, D. Data Collection, Practice, E. Data Analysis, F. Interpretation, G. Manuscript Preparation

奏できることも有効な即戦力となる」⁴⁾と述べている。

これらの先行研究では、効率のよい技術習得を目的としたり、意欲的に課題に取り組ませることに重点が置かれたりしている。

本研究では、その場の状況に即座に対応して演奏できる応用力育成に焦点をあて、それぞれの学生の実態に合わせた教材を選択し、音楽実技指導を行った。その中でもピアノ実技指導を中心にとりあげる。

II. 目的

本研究の目的は、以下のとおりである。

1. 演奏技術を社会活動の場でいかすことができる、応用力の育成のための教材選択と授業の構築。
2. 構築した授業の実践結果による、授業内容の検証。

III. 方法

本研究の方法は、実践的方法である。応用力育成のために必要な音楽的技能習得のための授業を構築し、実践を行う。そして個人の進捗状況の観察と学生の振り返りレポートにより考察する。

1. 研究の対象者

大学2回生14人（男子1人、女子13人）

2. 実施期間

「音楽実技Ⅰ」

前期30回 X年4月7日～X年7月21日

「音楽実技Ⅲ」

後期30回 X年10月20日～X+1年2月23日

3. 授業の概要

3人の教員で学生を4～5人のグループに分け、音楽実技の個人指導並びに班別指導を行う。1年間を通して同じ学生を担当する。前期、後期ともそれぞれ全30回のうち、3回の授業は、30分を一斉授業とした。90分1コマの授業を連続で2コマ、計30回の授業を行い、それぞれ30回目に総まとめを行う。

授業は、ピアノの技能習得のための実技を中心とした教材と、即興的にコード伴奏ができる技能の習得のための教材を活用する。

(1) ピアノ実技

ピアノ初心者には読譜指導から始める。次に、運指や楽譜と鍵盤の位置の確認を行う。そして正確な音、リズム、テンポで演奏できることを目標とする。

経験者に関しては既習範囲を把握した後に、個人のレベルに合った曲を課題として与える。授業での理解度や習得の進捗は個人差があるため、授業を進めながら適宜個人の演奏能力を把握し、図1に示すように各学生に合った曲を選んでいく。

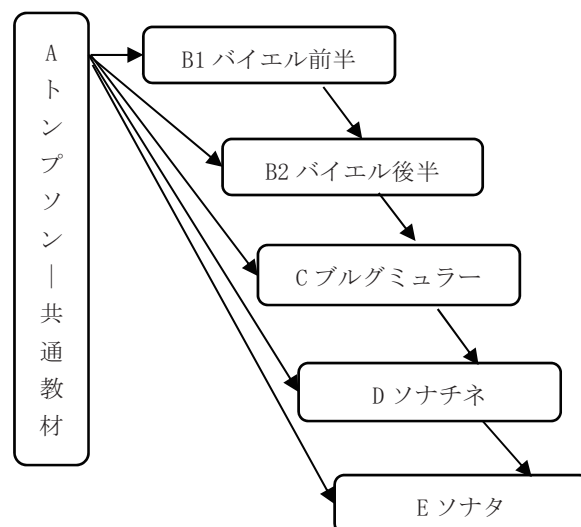


図1：教材選択の流れ

トンプソン「現代ピアノ教本1」は、ピアノ初心者のために作曲された小品からできている。音楽形式のパターンについての説明とそれが組み込まれて作曲された曲の演習により、奏法や音楽理論を少しずつ学習できるように構成されている。幼児だけでなく、年齢を問わず初心者向けの教材といえる。したがって初めてピアノを履修する学生にとっても平易すぎず、整理された学習のポイントによって、取り組める。

前期では、全員がまずトンプソン「現代ピアノ教本1」から「白鳥」・「ぼくのふね」・「きつつき」・「ナイトとレディー」・「モーツァルトの曲から」・「小さなワルツ」・「青がなばれ」・「スペインのフィエスタ」・「夕べの鐘」・「なつかしいむかし」・「きよしこの夜」の11曲を共通課題とした。これら11曲はそれぞれにピアノ実技の基礎として大切な音楽的要素や技術習得に欠かせないテクニックの要素が含まれている（表1参照）。課題曲をすべて合格した者は、さらに個々にあった曲を「標準 バイエル教則本・併用曲集付き」、ブルグミュラー「25の練習曲op.100」, 「ソナチネアルバム」, 「ソナタアルバム」などより選曲する。

表1：トンプソン課題曲の学習ポイント

曲名	各曲の特徴と学習目標
白鳥 (ハ長調)	基本的なダイナミクスを覚える。 繰り返し出てくるメロディーの パターンで音楽の明暗が表現で きる。 また、リタルダンドでテンポの 変化をつける。
ぼくのふね (ニ長調) #2	2つの音のフレーズの弾き方と八 分音符のリズムを覚える。
妖精の宮殿 (ハ長調) b1	マーチのリズムと左手のハ長調の マーチの伴奏形パターン、フェル マータの効果を使って次の音楽へ のつなげ方を学ぶ。
きつつき (ト長調) #1	スタッカートの奏法とト長調の和 音伴奏のパターンを覚える。また、 レガートとスタッカートの対比が 表現できる。
ナイトとレディ (イ長調) #3	弱起の始まりを学ぶ。また、繰り 返し出てくる左手の伴奏形のパ ターンを練習することにより、イ 長調の和音の形を覚える。
モーツァルトの曲から (イ長調) #3	付点四分音符+八分音符のリズムを 覚える。
青がんばれ (ハ長調)	8分の6拍子を覚える。短くシン ブルなメロディーにより、拍子感 を容易に体得できる。
スペインのフィエスタ (ハ長調) b1	シンコペーションのリズムの導入。 左手の伴奏形とリズムのパターン によって、曲のメリハリを表現で きる。
なつかしいむかし (ニ長調) #2	耳なじみの良いメロディーに、ア ルベルティバスの伴奏形のパ ターンを習得する。
かえるのコーラス (ト長調) #1	手を交差させて弾く奏法を学ぶ。 右手の音域が広がることにより、 強弱とともに音の高低で表現で きる。
きよしの夜 (ハ長調)	左手の分散和音の伴奏形を覚える。 曲の途中で音部記号が変化する楽 譜に慣れる。

後期では前期で習得したことを基本として、全員がピアノ演奏技術のさらなる向上を目指す。新たに「標準バイエル教則本・併用曲集付き」より課題を設定し、個々にあった曲をブルグミュラー「25の練習曲op.100」,「ソナチネアルバム」,「ソナタアルバム」などより選曲する。

(2) 伴奏づけ

教材は、橋本晃一「おとなのためのピアノ教本併用スリーコード・ピアノレッスン」を使用する。本教材は楽譜が大きく、学習者がコードで実際に弾く音を書き込めるよう工夫されているため、音と記譜音を関係づけて学習することができる。教材の楽譜上の五線に音を自主的に記譜する学生も多くいたが、このことは、自作の伴奏形を視覚的に捉えて演奏ができるという利点がある。

前期では、ハ長調のスリーコード(C・F・G)を使ってメロディーに伴奏づけができることを目標とする。初めにコードネームの説明を行い、スリーコードの基本形及び転回形を習得させる。I-IV-V-Iのコード進行を基本にして転回形も含めたコードを学習する。

後期では、ハ長調のスリーコード(C・F・G)に加えドミナントセブンスコード(C₇・D₇・E₇・A₇)やマイナーコード(Dm・Am・Em)を使って、メロディーに多彩な伴奏づけができることを目標とする。橋本晃一「おとなのためのピアノ教本併用スリーコード・ピアノレッスン」に載っている伴奏のアレンジを2～4通り弾く。余力のある学生には教材には無いオリジナルの伴奏を作曲してもらい、五線紙に書いて楽譜にした。

(3) 初見視奏

前期・後期各々30回目の授業時に初見視奏の課題を与える。大譜表の高音部譜表にメロディーのみが書かれた、レベルの異なる3種類の楽譜から各人が一曲を選び、前期はハ長調のスリーコード(C・F・G)で、後期はセブンスコードやマイナーコードを加えて初見で演奏する。

4. 評価

本授業の成績は音楽実技70%, 授業態度30%の割合で行った。音楽実技の部分については、(1)ピアノ実技、(2)伴奏づけ、(3)初見視奏の評価領域に分けた。(2)伴奏づけと(3)初見視奏が、今回焦点化している応用実践力の領域である。各領域の評価の観点は以下の通りである。

(1) ピアノ実技

楽譜を見て、あるいは暗譜で演奏することができる。

- ①正確なテンポで弾くことができる。
- ②正確なリズムで弾くことができる。
- ③正確な音で弾くことができる。
- ④ダイナミクス(*f*や*p*など)を表現することができる。
- ⑤最後まで止まらずに弾くことができる。

ブルグミュラー「25の練習曲Op.100」以上のレベルについては、以下の項目も追加する。

- ⑥音楽的に表現できる。

⑦曲に合ったテンポで弾くことができる。

(2) 伴奏づけ

橋本晃一「おとなのためのピアノ教本併用 スリーコード・ピアノレッスン」より、任意の一曲に伴奏をつけたものを、楽譜を見ながら演奏することができる。

- ①曲に合ったコードで弾くことができる。
- ②曲としてまとまった演奏をすることができる（正しいテンポ、リズム、音やダイナミクス）。
- ③スリーコードを使って、曲に適した伴奏形で弾くことができる（リズム変奏も含む）。

(3) 初見視奏

大譜表の高音部譜表にメロディーのみが書かれたレベルの異なる3種類の楽譜を試験当日に指定する（30秒の予見が可能）。その中から受験者自身が一曲を選曲し、ハ長調のスリーコード（C・F・G）で伴奏をつけて初見で演奏する。

- ①ハ長調のメロディーに対して正しいスリーコードで伴奏づけができる。
- ②伴奏づけをしたスリーコードを正しく弾くことができる。
- ③楽譜通りに正しいリズムと音でメロディーを弾くことができる。
- ④曲に合ったテンポで弾くことができる。
- ⑤初見の曲に対して、臨機応変に対応して弾くことができる（リズム変奏も含む）。

IV. 結果

1. 進捗状況の結果

(1) ピアノ実技 (2) 伴奏づけ (3) 初見視奏における進捗状況の度合いの観察は以下ようになった。

(1) ピアノ実技

前期のトンプソン「現代ピアノ教本1」の合格曲数は、表2のようになった。

表2：トンプソン「現代ピアノ教本1」合格曲数

合格曲数	合格者数 ※（ ）は初心者
17	2 (1)
18	2
19	3
20	3 (2)
21	3
22	0
23	1

(2) 伴奏づけの様子

教材には同じようなリズムパターンが何度も出てくるため、前期では、伴奏形を早く身につけることができた。また、学生が自ら新しい伴奏形を見出した。

後期では、右手のメロディーに左手で伴奏をつけるだけでなく、両手で伴奏をする演奏や、リズム変奏を工夫した演奏をする学生もいた。

(3) 初見視奏

評価の観点をすべて満たしている場合を50点とした。

前期は50点が0人、45点以上が4人、40点以上が9人であった。

後期は50点が7人、45点以上が9人、40点以上が14人であった。課題の難易度が前期に比べて高かったにもかかわらず、全員の到達度が80パーセント以上という結果となった。これにより、一年間を通して技能の向上が見られたと判断できる。

2. 振り返りレポート

「音楽実技Ⅰ」「音楽実技Ⅲ」を通し、授業に関する振り返りレポートを実施した。以下その結果を記す（文言は、すべて学生の表記のとおり）。

No.1 コードネームは必要と思うか

必要と思う 14人/14人中

- ・伴奏を考えたり、弾くのに必要だから。
- ・初見で曲を弾く際には必要と思う。
- ・即興で伴奏する際に必要だから。
- ・コードネームを覚えると便利だから。

No.2 ピアノの技術は向上したと思うか

向上したと思う 14人/14人中

No.3 人前でピアノを演奏することに対してどう思うか

- ・緊張するし恥ずかしいが、もっと頑張ろうと思った。
- ・恥ずかしいし緊張するが、人前で弾くと上達は早いと思う。
- ・緊張してしまい練習の時よりも音を間違えてしまう。
- ・緊張したし恥ずかしく感じる。また、失敗したらどうしようかと思う。

No.4 この授業に対する感想

- ・初心者だったのにもかかわらず、すぐ上達させてもらった。
- ・毎週ピアノを弾く機会があり楽しかった。
- ・今まで良くわかっていなかったコードのことを詳しく理解し、身につけることができた。
- ・この授業のおかげで初めてピアノに触ることができ、楽しかった。
- ・コードを読む練習も楽しかったが、作曲→コードづ

けもやってみたかった。

- ・久しぶりにバイエルやソナチネをやったので、強弱や指の動かし方など良い勉強になった。
- ・スリーコードのパターンに頭をなやませた。
- ・バイエルも大事だが、もっと曲っぽいものを弾いてみたかった。
- ・コードについての勉強や自分で伴奏を考えることはしたことが無かったので、とても勉強になった。
- ・ピアノは難しくて大変だが、一年間やりきれて良かった。

V. 考察

社会における様々な場面で音楽実技を用いた支援をする場合に必要な力のひとつに、どんな曲でも臨機応変に対応しながら演奏できるという力がある。知らない曲であっても初見である程度演奏できること、また単旋律に対して簡単な伴奏をつけることができるといった力である。

本実践では、この力を習得させるために、教材の選択と個々にあった楽曲の構成に留意した。表1の学習目標を基に、楽曲を選択した結果、以下の点が考察される。

1. ピアノ実技

共通課題は11曲であったが、学生は17曲から21曲の合格を達成していることから、全員が意欲を持って取り組んだことが見て取れた。11名は、さらに上級課題への意欲を見せ、ブルクミュラー、ソナチネ、ソナタに取り組んだ。

基礎技能を効率的に習得するために選択したピアノ実技の教材、トンプソン「現代ピアノ教本1」の特徴は、

- ・各々の曲が8～16小節と短く、旋律や形式がシンプルである
- ・繰り返し同じパターンで伴奏が出てくる
- ・ポジション移動がなく5本の指の位置で弾ける

ことである。これらの教材の特徴をいかすことにより、初心者は無理なく片手から両手で弾くピアノ演奏技術を習得できたと考える。

2. 伴奏づけ

応用実践力をつけるために選択した教材、橋本晃一「おとなのためのピアノ教本併用 スリーコード・ピアノレッスン」の特徴は、以下の通りである。

- ・ハ長調のスリーコード（C・F・G）を理解しながら学習できる
- ・コードネームを見ながら単旋律への伴奏づけを習得できる
- ・同じことを繰り返しできるような内容構成であり、伴奏パターンのポジショニングが運動的に学習され

る

- ・よく知られた楽曲を用いた教材が多いことで、メロディーに興味を持ちながら、伴奏形の学習に集中できる

こうした教材選択と的確な楽曲構成による指導で、結果に示した通り、応用実践力習得の目的を達成できたと考える。

3. 初見視奏

初見視奏は即興的演奏ができる能力（応用実践力）を必要とする。図2で示したように、前期に比べ後期には、課題の難易度が増したにもかかわらず14名中13名が、課題を達成できていた。これにより応用実践力が育成されたと考える。

国内の大学では、音楽実技の科目において、教員一人当たり、90分間に最低でも5～7人の学生に個別指導を行うケースが多く見られる。本授業のように、1人20分×30コマ/半期の授業時間の確保は、基礎技能に加え応用実践力習得には有効であったと考えられる。

音楽実技の技術を向上し維持するためには継続することが必要である。そのためには、教員が講義終了した後の独習用の学習ガイドラインを示したり、学習の継続を啓発したりする必要があると考える。この1年で習得した知識や技術を活かすために、今後も学生には継続してピアノに触れ、生涯にわたり音楽と関わってほしい。

引用文献

- 1) 村木洋子,「歌唱共通教材(小学音楽)旋律の運指についてーピアノ入門者のためのー」, 山梨県立大学人間福祉学部紀要Vol.8, p.54, 2013
- 2) 高地誠子,「保育者養成においてピアノ実技の授業を通して育まれる内面的な成長と求められる指導者像」, 小田原短期大学研究紀要, 第46号, p.91, 2016
- 3) 諸井サチヨ,「保育者養成校での『弾き歌い』に関する一考察ー学生のピアノ技能に関する実態調査を中心にー」, 淑徳大学短期大学部研究紀要第55号, p.81, 2016
- 4) 石田陽子,「ピアノ実技指導でのキーボード・ハーモニ導入の試みーその有効性と課題を検証するー」, 四天王寺大学紀要 第63号, p.290, 2017

参考文献

- ・松本明,「幼児教育学生のピアノ演奏技能向上についての考察」, 川村女子大学研究紀要, 第28巻, 第3号, pp.81-94, 2017

- ・星野英五,「幼保小の連携に即した音楽関連授業の考察ー保育者の音楽意識の調査からー」, 名古屋芸術大学研究紀要, 第38巻, pp.249-255, 2017
- ・原浩美,「ピアノ実技指導に関する一考察ー短期大学生の実態からー」, 久留米信愛女学院短期大学研究紀要, 第37号, pp.23-31, 2014
- ・坂田直子, 山根直人, 伊藤誠,「保育者養成における音楽的専門性の育成ー幼稚園教諭へのピアノ等鍵盤楽器に関する質問紙調査を手がかりにー」, 埼玉大学紀要, 教育学部, Vol.58, No.1, pp.15-30, 2009